



將軍徳川綱吉に二度拝謁した ケンペル（1651―1716）

日本へ進出してきたキリスト教徒

一三八五年に成立したポルトガルのアヴィス王朝の初代国王ジョアン一世の三男エンリケ王子は航海王子という別名で有名なように、ポルトガルの船乗りを叱咤激励して未踏の大海を航海させました。その結果、一四八八年にB・ディアスがアフリカ大陸南端に到達、一四九八年にはV・ダ・ガマがアフリカ大陸を周回してインドへ到達する航路を開拓し、西岸にあるカリカットとゴアをアジアでのポルトガルの拠点としました。

一方、カソリック教会の司祭であったフランシスコ・ザビエルは数人の司祭とともにイエズス会を結成し、ポルトガル国王ジョアン三世の依頼でアジアにカソリックの信仰を普及させるためゴアに移動し、さらに日本を目指し、一五四九年に薩摩半島の坊津に到来しました。もう一人、ゴアでザビエルに出会ったルイス・フロイスも一五六三年に日本に到来し、織田信長から許可を取得して布教活動を行います。

信長は反抗する法華教徒への対策としてキリスト教徒を利用したのですが、羽柴秀吉の時代になって次第に勢力を拡大し、長崎を占拠する計画を構想するほどになったため、秀吉は一五八七年にバテレン追放を発令します。しかし江戸時代になり海外の情報が必要なため、長崎に人工の「出島」を構築し、一六三九年まではポルトガル人、それ以後はオランダ人を居住させ、それ以外の海外との交流を禁止するような制度にします。

### 魔女裁判の時代に誕生

この出島に一六九〇年に到来したのがドイツ出身の医師で博物学者であるエンゲルベルト・ケンペルです。ドイツ中部にある小国リッペーデトモルト侯国のレムゴ(図

1)という都市の牧師の家庭に一六五一年に三男として誕生しましたが、当時は三〇年戦争が終結した直後の荒廃した時期で、しかも魔女裁判が頻繁に実施され、多数の人々が処刑された時代でもありました。実際、ケンペルの叔父も斬首されています。

その処刑の直後にケンペルはハーメルンに移住し、さらに何度か生活場所を移転しながら二二歳になった一六七三年に大学の卒業論文に相当する論文を執筆し、様々な都市で生活しながらポーランドの歴史のある都市クラカウで医学と哲学を習得します。一六八一年にスウェーデンに移住しますが、ここで人生の転機に遭遇しました。経緯は不明ですが、スウェーデン国王がペルシヤに派遣する使節団の秘書官に採用されたのです。

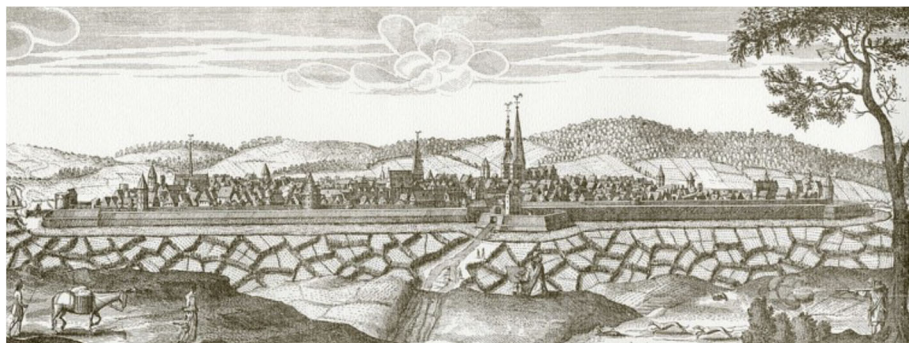


図1 レムゴ (1663)

## 二年かけてホルムズ海峡に到達

一六八三年三月下旬にストックホルムを出発した一行は春先の雪解けの地面に難渋しながらも四月下旬にロシアのニエンに到達します。ここは後にロシア帝国のピョートル一世がロシア帝国の首都サンクト・ペテルブルクとした場所です。当時はスウェーデンの領土であったため、ここでロシアへ入国する手続きをします。一ヶ月以上もかかりましたが許可を取得し、六月になって出発、七月にモスクワに到着しました。

二ヶ月間滞在したモスクワを九月に出発、カスピ海北岸のアストラハンに到達します。ここから湖上を移動し、年末からペルシヤの領土にあるシュマハに三ヶ月も滞在することになります。ケンペルの治療が評判になって人々が殺到したからです。ようやく翌年一月にカスピ海に突出した半島にあるバクーに移動します。現在はアゼルバイジャンの首都で人口五〇〇万人の都市ですが、当時でも一〇〇万人以上の巨大都市でした。

バクーからは南下して当時のペルシヤ帝国の首都イスファハンに到着しましたが、国王に拝謁するためには四ヶ月の待機が必要でした。ようやく豪華な拝謁の式典が行われましたが、隊長以下は当分、首都に滞在するため、ケンペルは一六八五年一月に一〇〇〇キロメートル南方のホルムズ湾岸の都市バンダレ・アッバースを目指して出発し、途中でペルセポリスの遺跡のあるシラーズを経由して年末に到着しました。

ここに約二年半滞在、一六八八年六月に、当時の世界最大の貿易会社であるオランダ東インド会社の帆船でアジアを目指して出発します。それ以後、インドを経由して一六八九年にオランダ東インド会社のアジアの拠点であるバタヴィアに到着しました(図2)。しばらく滞在していた時期にバタヴィア総督J・カンプハイスから日本での勤務を打診されます。オランダ商人が日本で活動するようになって約二〇年が経過した時期でした。

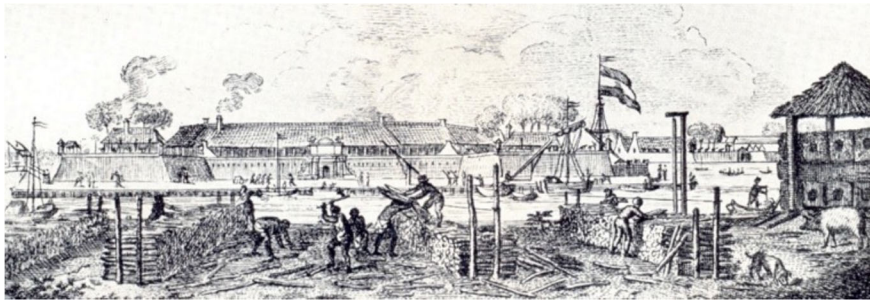


図2 バタヴィア (17世紀)



## 長崎の出島に滞在

こうしてケンペルは一六九〇年七月に日本を目指す帆船に乗船し、二度も台風に遭遇しながらも九月二四日に長崎の出島に到着しました(図3)。出発から八年が経過していました。幕府の役人が乗員名簿と来航した人間が同一かを審査、大砲などの武器は差押えるという措置をしてから上陸が許可されました。ケンペルは出島を「牢獄」と記録していますが、出入は厳重に管理され、活動も監視されるなど生活は制約されていました。



図3 出島

ザビエルやフロイスが到来した一六世紀中頃は布教活動も自由でしたが、高山右近や大友宗麟などキリシタン大名が登場し、庶民にも信者が増加してくるような状況から、徳川幕府は一六一三年に禁教令を発令し、貿易を中心にする活動に制約し、それを徹底するために出島に外国人を隔離するようになったのです。この出島は長崎湾内に一六三六年に埋立で完成した四〇〇〇坪ほどの小島で、一本の橋梁で本土と接続されていました。

そのように自由に行動できない状況から、時間に余裕ができたケンペルは日本の言葉を学習するようになり、活動も博物学者である基礎を背景にして日本の植物を採集して研究するようになります。これは結果として正解で、長崎奉行の一人などはケンペルの行動を評価するようにさえなっています。そうして日本に馴染んできた結果、当初は一年の滞在予定でしたが、二年に延長するよう申請し、許可されました。

## 江戸参府旅行に随行

日本滞在を二年に延長した結果、ケンペルは将軍に拝謁する江戸参府旅行を二度も経験することになります。江戸参府は一六三三年からの制度で、日本との貿易を許可されて出島に滞在するオランダ商館の館長は毎年一回、長崎から江戸に参上し、将軍に拝謁して品物を献上する仕組です。毎年一月にオランダの出島商館長を先頭に長崎を出発して江戸に到達し、三週間程滞在して将軍に拝謁するという制度です。

この江戸参府は数人が徒歩で移動するような簡単な行事ではありません。大名行列ほどではないにしても、一六九一年の様子を描写したケンペルの著書の図版で計算すると、人間が一〇〇名以上、ウマが約二〇頭という規模の行列です(図4)。将軍には品物を献上する必要があり、それも簡単な土産という程度ではなく、以前、四代将軍家綱に拝謁したときには日光東照宮の家康の霊廟にヨーロッパの灯籠を献上しています。



図4 江戸参府(1691)

ケンペルが参加した拝謁の相手は五代将軍綱吉です。綱吉は「生類憐れみの令」を発令して人間より動物を可愛がったなど暴君のように評価されていますが、実際は儒学の振興のため湯島聖堂を建立するなどの名君であり、さらに一七〇三年に関東南部に被害をもたらした元禄大地震、一七〇七年に江戸にまで降灰のあった富士山噴火などにも迅速に対処しており、ケンペルは「善良かつ公正で賢明な君主」と評価しています。

## 二度の江戸参府旅行

ケンペルはオランダ商館長に随行して江戸へ移動し、一六九一年三月二十九日に江戸城内で將軍綱吉に拝謁しています。場所は十分に一〇〇畳はある広大な広間で、正面に御簾があり、その裏側には將軍と正室をはじめ数一〇人の側近が列席しており、その前面にオランダ商館の一行が拝謁します(図5)。一通りの挨拶が終了すると、將軍から一行に演技を披露するようにとの要請があり、ケンペルは歌謡と舞踏を披露しています。

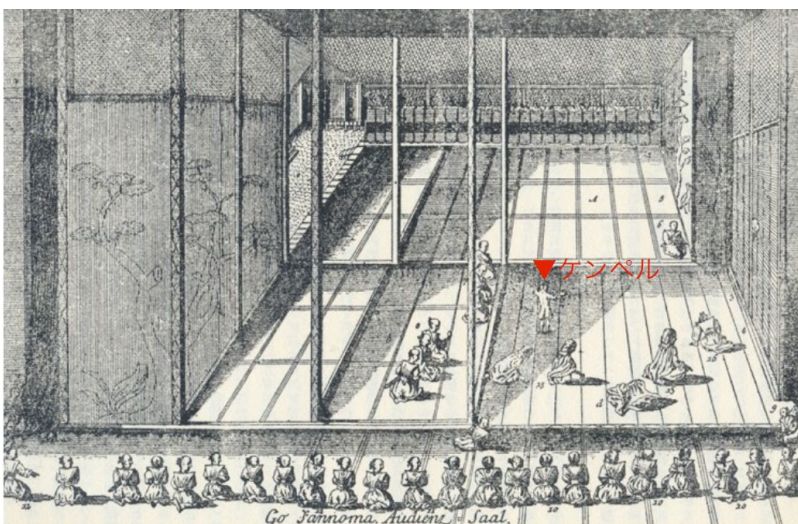


図5 將軍徳川綱吉に拝謁(1691)

それから別室で將軍が様々な質問をする会合があります。ケンペルが医師であることから病気や治療についての質問が集中し、それらに回答していますが、將軍から不老長寿の薬剤について質問されたときには専門用語で返事をし、日本には材料が存在しないので調合できないと回答したところ、海外で調達するようという指示がありました。これで行事は終了し、それ以上の滞在は許可されず、長崎に帰還しています。

翌年の一六九二年の江戸参府にもケンペルは同行し、再度、將軍綱吉に拝謁しますが、今回はオランダと日本の風習の相違だけではなく、オランダの国家の統治の制度まで質問されています。ここから判断しても將軍綱吉が犬公方と揶揄されるような人物ではないことが明確です。さらに今回は食事が提供されるという特別の饗応があり、これまでの幕府の対応と比較して特別でしたが、それはケンペルの博識が評価されたものです。



## 二冊の貴重な記録を出版

予定の二年の日本滞在が終了し、一六九二年晩秋に日本を出発します。最初にオランダの東方の拠点であるバタヴィアに短期滞在し、アフリカ大陸南端を回遊して一六九三年一〇月にオランダに到着しました。スウェーデンの使節としてストックホルムを出発してから一〇年が経過していました。航海の途中の船内で推敲していた医学の博士論文を仕上げてライデン大学に提出し、一六九四年四月に博士の学位を授与されています。

それから生誕の都市レムゴの近郊に帰還し、医師として開業しながら、一〇年余の海外の経験を書物にします。一冊は旅行の前半のペルシャまでを記載した『廻国奇観』（図6）で一七二二年に出版され、後半の日本については『日本誌』（図7）として記述しますが生前には出版されず、一七二七年に英語で出版されました。本人の作成した図入りの大部の著書ですが、一七世紀の日本を詳細に紹介する貴重な書物となっています。

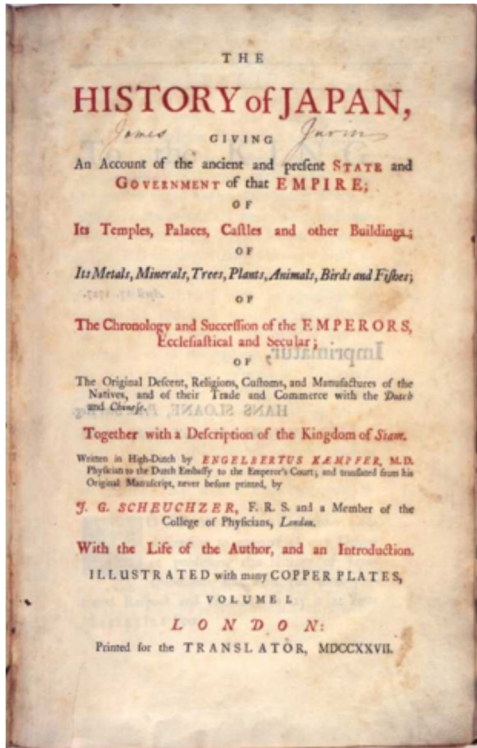


図7 「日本誌」(1727)

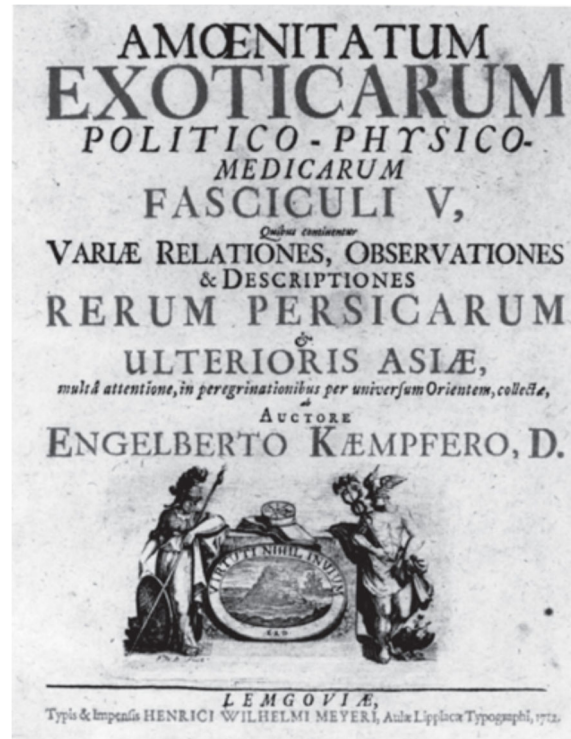
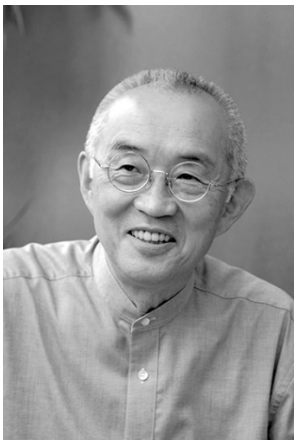


図6 「廻国奇観」(1712)



つきお よしお 1942年名古屋生まれ。1965年東京大学工学部卒業。工学博士。名古屋大学教授、東京大学教授などを経て東京大学名誉教授。2002、03年総務省総務審議官。これまでコンピュータ・グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策などを研究。全国各地でカヌーとクロスカントリーをしながら、知床半島塾、羊蹄山麓塾、釧路湿原塾、白馬仰山塾、宮川清流塾、瀬戸内海塾などを主催し、地域の有志とともに環境保護や地域計画に取り組む。主要著書に『日本百年の転換戦略』（講談社）、『縮小文明の展望』（東京大学出版会）、『地球共生』（講談社）、『地球の救い方』、『水の話』（遊行社）、『100年先を読む』（モラロジー研究所）、『先住民族の叡智』（遊行社）、『誰も言わなかった！本当は怖いビッグデータとサイバー戦争のカラクリ』（アスコム）、『日本が世界地図から消滅しないための戦略』（致知出版社）、『幸福実感社会への転進』（モラロジー研究所）、『転換日本 地域創成の展望』（東京大学出版会）など。モルゲンWEBの連載「清々しき人々」より、『清々しき人々』、『凜凜たる人生』、『最新刊『爽快なる人生』（遊行社）など。